

# 言葉の理解を目指した主体的な学びについて

～「おはなし」の時間を活用して～

長野県松本盲学校 講師 布施 加奈子

## 1 はじめに

本校幼小部は単一学級2名、重複学級4名の計6名である。早期教育の時から教師との1対1の個別学習で学習してきており、同年代の子どもとの関わりや集団活動の経験が不足している。集団遊びの中で習得しているであろう言葉の意味も、経験が少ないため曖昧なままで過ごしていると感じることが多い。また、見えない・見えにくいという障がいのために、言葉を聞いただけでは理解が難しく、不確かなまま過ごしている場面が多くみられる。

6名全員が同じ場で学ぶ時間は、毎日の朝の会・帰りの会と、体育の時間（週3時間）、「おはなし」（週1時間）の時間である。「おはなし」の時間は隔週でおはなしの会のボランティアの方が来校してくださり、絵本や紙芝居の読み聞かせを聞く時間となっている。ボランティアの方が来校しない週の読み聞かせは、今まで教師のおすすめ本を紹介してきていた。この「おはなし」の時間を、子どもたちの主体的な学びにつながるよう内容を見直し、身近によく使う「動作」をテーマとして、読み聞かせを行うようにした。絵本については、子どもたちに興味がありそうな内容を、幼児児童の実態に応じて担任が選んだ。また、具体物に触れたり身体を動かしたりする活動を多く取り入れることを大切にしながら授業実践を行ってみた。

## 2 実践の概要

日常生活や授業の中で意味の理解が不十分な言葉や補足したい内容を選び、計画を立て、毎月一人ずつCTを担当して読み聞かせを行う。

### （1）テーマ「止まる」 体育の時間と連携して

使用した絵本 『だるまさん』シリーズ

まずはどの幼児児童も繰り返し聞いたことのある『だるまさん』シリーズを扱うことにした。『だるまさんの』を読みながら、本に合わせて自分の身体に触れてみた。簡単にできることから始めることで「自分にできそうだ」「次はなんだろう」と身を乗り出す様子があった。次に全員が触れられるサイズのだるまを用意し、『だるまさんが』をゆっくりと読みながら、一緒に動いたり止まったりすることを行った。普段は物に触れることに慎重な全盲のA児も、自分から机の上にあるだるまに触れる姿が見られた。絵本通りにはうまくだるまを動かせない表現もあるが、言葉のリズムに合わせてだるまをゴロンゴロンと動かした後、次の言葉でピタッと止めることを繰り返すと、支援なしでもだるまを動かすことができていた。



また、体育の時には集団遊びの「だるまさんが転んだ」を行い、動いている状態と止まっている状態を確認しながら集団遊びをしてみた。全員の足首や手首に鈴をつけることで、全盲児にも対応した。「おはなし」の時間にだるまの動きを通して「ピタッと止まる」ことを体感していた経験もあり、「ピタッ」と口に出しながら止まることを意識している姿が見られた。「おはなし」の時間と「体育」に同じテーマで取り組むことで、より理解しやすかったように感じられる。また、遊びのルールがまだ身についていないなど、他の課題も見つかり、ごっこ遊びや集団ゲームなどを適宜取り入れていく必要を感じた取り組みとなった。

## (2) テーマ「はんぶんこ」 未経験のことを取り入れて

使用した絵本 『はんぶんこ はんぶんこ』

『はいいろひめさま かぞえうた』

友だちに「どうぞ」と何かを渡すことが好きな児童の様子から、パンの模型を作って半分ずつに分ける活動を読み聞かせと合わせて行った。一人っ子や、兄弟がいても一人ずつ物を与えられる経験が多く、物を半分に分けてあげるということをしたことがない児童も多いため、「はんぶんこ」をテーマにしてみた。思うように半分にできずに苦戦しながらも、分ける物をじっくりと見たり、重さを確かめたりする姿が印象的だった。



その後、単一障がいの B 児は、算数の時間を利用してブロックや新聞紙を半分にわける学習も行った。いろいろな具体物を操作することで、集中して学習し、確かめることができた。理解度に合わせて事後の指導を各々で行うことで、理解が深まったといえるだろう。B 児にはその後、部で採れた野菜を人数で分ける活動を継続し、割り算の導入の学習へとつなげていくことができた。



## (3) テーマ「伸びる」 具体物の操作を取り入れて

使用した絵本 『こねてのばして』

「はんぶんこ」の学習で、楽しそうに粘土を分ける様子が見られたので、小麦粉粘土を使っの読み聞かせを行った。『こねてのばして』の読み聞かせにできるだけ動作を合わせながら、小麦粉粘土と一緒に操作してみた。「伸びる」というテーマで、ひっぱって伸ばしたり、のべ棒を使って平らに伸ばしたりする活動を取り入れた。回を重ねると、教師の「伸ばして～」の声



に合わせて、粘土を横に引っ張ることができていた。「背が伸びる」や、「ゴムが伸びる」も併せて扱いたかったが、時間が不足してできなかった。「元の長さより長くなること」として、指し棒も触ってみた。感触遊びの要素を取り入れることで、座って長時間読み聞かせを聞くことが困難な重複障がい児も、最後まで一緒に活動できたことが良かった。



(4) テーマ「みがく」「あらう」 コロナ禍での読み聞かせ 健康教育 (各教室からリモート)

使用した絵本 『バイバイ！むしバイキン』 『はははは』  
『オムライスハイ！』 『おいしいおと』

感染予防対策のため、集合しての読み聞かせができなくなった。しかし、各教室をZoomで繋ぐことはできたので、歯磨きや手洗いがテーマの絵本を読みながら、実際に歯磨き、手洗いを行った。教師がお互いの児童の様子を実況することで、友だちの様子を気に掛けながら、ていねいな手洗いを試みていた。集合はできなかったが、各教室で同時に活動ができたことで「上手に洗いたい」という意欲につながった。

(5) テーマ「歩く」 間隔を空けて再度の取り組み

使用した絵本 『はらぺこさん』 『おんどりあるくよ』  
『はるかぜさんぽ』 『トコトコさんぽ』

気候が良く部全体で外を歩く活動も増えてきたことから、「歩く」をテーマに取り上げてみた。『おんどりあるくよ』でいろいろな動物の動き(おんどりはどうどうとあるく など)を真似してみたり、『はるかぜさんぽ』ではてくてく歩くという表現を行ってみたりした。また、『トコトコさんぽ』では、楽しい気持ちで歩くことをねらいとして、主人公のクマの様子を真似しながら、一人ずつ帽子やスカーフ、眼鏡などを着用して順番に歩く活動を行った。眼鏡や長靴などを着用したことがない幼児児童もいたが、それぞれが具体物を持ったり着用したりしながら、教室内を歩くことができた。



しかし、「てくてく」や「とことこ」などの歩き方の違いについては触れる時間がなかったので、時間をおいて次年度にもう一度同じテーマでの読み聞かせを行った。そこでは、のそのそやそろりそろりなど、一人ひとりに「どんな歩き方をする？」と問いかけ、自分で選んだ歩き方で歩くことで、「次はぼくだ」という意欲を感じたり、足音の違いや歩く速さに着目したりすることができた。

## (6) テーマ「浮く」 体育の時間と連携して

使用した絵本 『やさいたちのうた』『こぐまちゃんのみずあそび』  
『みずとはなんじゃ?』『およぐ』

水泳学習が始まり、どの幼児児童も水遊びが好きな活動であることがわかった。大きなプールでの水にだんだんと慣れてきて、道具を使って浮くことに挑戦し始めた児童や、まだ怖くて浮くことができない児童がいることから、「浮く」をテーマにして学習を行った。

今回は、読み聞かせを始めに行った後で、じっくりと確かめの時間を設けた。シャワーの音を聞いてコップの水のおいをかいた後、バケツの中で、プラスチックボールや石、小さいかた、プラスチック製のおもちゃ、氷などの物を浮かべたり沈ませたりする体験を行った。バケツの中の水は、どの幼児児童も怖がることなく、積極的に確かめることができた。特に、ボールが水に沈めた後に勢いよく浮き上がってくる様子は、繰り返し体験している子どもが多かった。バケツの中でボールと石の位置を比べた後、年長児におもちゃを渡し、どちらと同じが尋ねると、「ボールと一緒に。」と答えていたので、水の中の物の位置を理解していることがわかった。この後、生活単元学習などでいかだ作りなどの活動に発展していてもおもしろそうだという手ごたえを感じた。



## (7) ボランティアさんとの連携

ボランティアの方々の読み聞かせの時間は、以前は内容をお任せにしていたこともあり、少し難しい内容や、絵を見ることを楽しむために作られた絵本が選ばれることがあった。そこで教師が具体物を用意して読み聞かせをしていることを伝えると、季節の野菜や果物を用意して、具体物に関連した絵本を選んでくださることが増えてきた。摘みたてのヨモギを持ってきてくださった時には、別の時間にヨモギ団子を作って活動を広げることもできた。

また、教師側から感じた幼児児童の様子を、読み聞かせの後にボランティアさんに伝えるようにすると、難しすぎる本を選ばれることがなくなってきた。そのことにより、年齢や理解度、障がいも異なっても、一人ひとりが楽しめるようになってきている。



### 3 まとめ

～テーマ設定をした読み聞かせを2年近く行ってきて～

読み聞かせのテーマの決めだしについては、教師の願いが強いかもしれないが、絵本を選ぶにあたっては、どんな活動を取り入れたら児童が興味を持てるのかを一人ひとりのことを思い浮かべながら選び、読み聞かせの間も各自に応じた支援を行ってきた。

「おはなし」の時間を行うための選書については、弱視児には絵がシンプルで言い回しがユニークな本が好まれ、全盲児には空想の内容が少なく実体験などイメージを持ちやすい内容がわかりやすいというように、全員に合った絵本はなかなか探し出すことが難しかった。また、数回扱っただけでは、言葉の理解の定着とまではいかなかった。しかし絵本には、場面ごとに取り上げることができたり、容易に繰り返し学習することができたりする魅力があるので、言葉の学習に絵本の活用は有効であると感じた。毎回、内容に合わせた具体物を用意することで、子どもたちから「今日は何が出てくるのだろう」「次はだれ先生だろう」という期待感の高まりを感じた。

また、同じ内容で2回以上の読み聞かせを行っているが、1回目よりも2回目以降の方が、具体物に対してよく手が出るという全盲児の姿が見られた。1回目では無反応だった場面でも、2回目には積極的になることもあり、すぐに内容を見直すよりは、繰り返して様子を見て検証した方がよいこともわかった。

職員間では、テーマを選んだり授業の振り返りをしたりする中で、それぞれの幼児児童の主体性や理解の程度、課題は何であるのかといった点で共通理解ができ、チームとして今後の指導方法や指導内容を設定するのに役に立った。

扱いたい内容は多いが、テーマを絞ることで丁寧な指導ができると感じる。今後は、系統性のある言葉で取り組んで理解度を検討したり、自立活動専任教諭と「児童が興味をもった言葉」をピックアップしたりするなどして、授業実践を積み重ねていきたい。